

---

A・S **不条理な感情**

えなりー

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

A・S 不条理な感情

### 【Nコード】

N2935U

### 【作者名】

えなりー

### 【あらすじ】

「A・S」という組織に属する青年、志賀とその友人で協力者、千尋裕也、二人の物語。出会いから三年。二人の出会いには、悲しい出来事があった…。アクションとESPも少しからめて。

HPからの転載。そちらは「つれづれのページ」

<http://www.tim-ho.ne.jp/enail/>です。

## 第一章 【1】（前書き）

BL風味を目指しています。

## 第一章 【1】

息をきらせて男は逃げている。

年の頃は30代半ばのその男は、つんのめり、よろけながらも必死に逃げていた。

ゴミ箱を蹴倒し、酔客を突き飛ばしながら、真夜中の繁華街の裏路地を彼は逃げる。

人目を気にする余裕もない。

無精髭の目立ち始めた口元を喘がせ、

時折、後ろを気にしながら狭い路地を必死に走る。

繁華街の光から更に遠い、闇の勝る雑居ビルの狭間の、暗い細路地を、

男は手を擦り傷だらけらし、ふうふう言いながら通り抜けると、少し広い道に出た。

男は辺りをキョロキョロと見回して、その道を今度は右の方向に駆け出した。

「……路地を出て右に走り出しました……」

膝の上に広げられた一枚の地図。その地図上に指を辿らせながら発せられた声は、

暗闇の中ながら、若い男性のものだと分かる。

その指は、そこからは決して見えないはずの、離れた場所にいる、逃げる三十路男の辿る道を、地図上に正確にトレースし、

息をきらせて逃げる男のその姿を、その瞳に正確に捉えて、追っていた。

「……今度は左の、細い路地に入りました」地図を辿る指が、地図の一点を指し示した。

「……駐車場が近いですね。そこに行くつもりでしょうか……」

あえてルームランプはつけずに、ペンライトで手元の地図を照らし出す男の面差しが、  
ほのかな灯りの中に浮かび上がる。

20代後半と思いき、若い、優しい顔立ちが地図に視線を落として  
いる。

そんな彼と、彼の手元の地図を、前部運転席の男が、  
座席越しに振り向いたまま見詰めている。

こちらは口元に刻まれたしわも、やや目立ち始める年代の男で、  
セダンの後部座席に座っている若い男の言葉に真剣に耳を傾けてい  
たが、

耳元に装着しているヘッドセット型の通信用インターカムを通じて、  
男から伝えられた内容と、正確な地図情報を、仲間へと伝えた。

ハアハアハア…。

逃げる男は息を切らせながらもしきりに後ろを気にしていたが、  
追ってくる気配がない事にホッとしながら、口元を悔しげに歪めた。  
ポテイガードとして雇っていた男たちは二人とも

最初の襲撃を受けた時に『ヤツら』にあっさりと地に沈められた。  
素人ではなかったのに。『この仕事』を十分に心得ている連中だっ  
たのに。

ヤツらは一体何者だ？

返答の期待できない疑問が浮かぶ。ライバルの同業者だろうか。

それとも、どこかの抗争に知らず関わってしまったのだろうか

…？

…とにかく逃げよう、と男は思った。

大丈夫だ。自分は襲撃をかわして今、逃げている。

そして自分に言い聞かせる。

ここは自分がよく知る地域で土地勘がある。逃げ切れる。大丈夫。

そんな事を考えながら男は道を進み駐車場にたどり着き、ホッと息を吐いた。

よし、大丈夫だ。自分の運はまだまだ尽きていない…。

ポケットからキーを出しながら自分の車に近づく。

キーでロックを解除し、ドアを開けようとした時だった。

「うわっ…!?!」

不意に後ろから伸びてきた腕が男の腕をねじり上げた。

抗う間もなく、気がついた時には、男は右腕を後ろ手に取られ、地面に膝をついていた。

「何…」男が首をひねって後ろを見ると、精悍な顔立ちの若い男がいた。

その男に抑えられた腕はガツチリと固められてビクとも動かなかった。

「き…きさま…!」

「残念だったな。うちには”高性能レーダー”があるんだ。逃げ切れやしないよ」

「クッ…!」

若い男は薄笑いを浮かべながら手際よく男に手錠をはめた。

「ああ、あるぞ。合成麻薬」

その声に、手錠をはめられた男がハツとして振り向くと、

そこには更にもう二人の男が居て、車のダッシュボードや座席の裏等を調べて、

彼の『売り物』を見つけ出していた。

見つけた男は手のひらの上で一辺が15センチ程のその包みの重さを感じながら

「大した分量だ。荒稼ぎだな」とコメントした。

「…お前ら、警察か…?」

捕まった男の、相手を伺うような目線に、手錠をはめた男はニツと笑って答えた。

「ざーんねん。その方が簡単だったかもねえ……」

「何……？じゃあ……」

「知ってる？『A・S』って組織」

「『A・S』……？ クスリを売っているわけでもないのに、

あちこちの売買組織をつぶしにかかっている……っていう……あの……？」

「そう、その『A・S』なんだな、うちら」

## 第一章 【1】（後書き）

完結目指して頑張ります。

## 第一章 【1・2】（前書き）

BL風味を目指しています。

## 第一章 【1・2】

「…うむ、分かったご苦労さん。その男を連行しておいてくれ。それで今日の仕事は終了だ」

通信用インターカムにそう返答した男は、しわのある口元を緩めながら

後ろの席で地図を畳む男に「終わりましたよ」と声をかけ、

男の、その左手の薬指に、鈍く銀色に光る指輪があるのを視認した。

声をかけられた男は、捕物劇の情景が既に見えていたようで

「そうですね。今回は思ったより早く終わりましたね」

と安堵の表情を浮かべた。

運転席の男は「千尋さんのご協力の賜物ですよ」と、

地図をたたみ終わった男に謝意を表した。

「あの男はこの辺りで合成麻薬を売買してる連中の一応トップです。ね。」

まださほど大きな組織というわけでもないのですが、そろそろ組織ごと潰さないといけなくて。

今回、この組織の他の拠点やクスリの製造場所にも同時に奇襲をかけたのですが

叩き潰すと同時に組織のトップを抑える必要がありました。

『頭』に逃げられてしまったのは、結局、作戦は失敗ですからね。

その大事な部分を今回は千尋さんにも手伝って頂いたわけです」

千尋と呼ばれた男は

「こつという仕事なら、僕も協力し易いです」

と、表情をいくらか柔らげた。

表情を緩めるとまだ学生っぽく見えるな、と運転席で男は、千尋と、その左手の指輪をチラリと見比べながら、まだ若い結婚も早いタイプだったんだな、と考えた。

「もうしばらくしたら、志賀もこちらに合流してきます。

そうしたら彼に送らせますから」「いえ、一人で帰れますよ」

「千尋さん。あなたをきちんと送り返す事も今回の仕事の内ですから。」

あなたは『A・S』とは基本、関係がない立場なのに、こうして我々にご協力頂いている…。あなたの安全確保も仕事の内です」

「はあ…」

千尋が生返事を返していると男は視線を車の窓の外の暗闇に向けた。「来たようですよ」

そのようだった。カッカッと地面を叩く靴の音が近づいてきたと思うと、

助手席のドアがボタンと開かれ、男がどすんとシートに体を放り込んできた。

「仕事すみました、係長っ！」

シートに体重を預けながら運転席を見るその男は、

やはりこれも若々しい声で報告を始めた。

「行動が先手先手で掴めたので短時間で作戦終了出来ました。本部への護送も今、済ませた所です。以降の取調べは俺の仕事じゃない」

そう報告を行う男は先程、逃げる男に手錠をかけた男だった。はつらつとした表情と、しっかりとした意志を感じさせる

その顔立ちを、短めの、ややねたクセのある髪がふちどっている。  
「おお、志賀くん、ご苦労さん」運転席の、係長と呼ばれた男は  
口元を綻ばせて部下を労った。

志賀と呼ばれた男は、後部座席の千尋を振り返った。

「千尋さんのくれる情報は正確なので仕事が楽でした。

「負傷者も出さずに”目標”のすみやかな確保も出来たし、  
仕事も早く片付く。万々歳だ」

その乾いた物言いに千尋は小さく苦笑した。

「怪我人が出なくて良かったです」

「係長、俺、千尋さんを送っていきます。それで今日は仕事を上げ  
りますから」

「うむ、分かった」

「さあ、千尋さん行きましょう」志賀は千尋を促し、二人は車を降  
りた。

セダンから離れて歩きながら志賀は千尋に言葉をかけた。

「俺の車は一区域先の駐車場に止めてあるんで、

ちょっとそこまで、付き合っして下さい」

二人が車から離れ、歩き出した場所は繁華街の、とある古ぼけたビ  
ル裏の路上だった。

その場所は今夜捕まえられた男が拠点にしていたビルと  
さほど離れてはいない場所だった。

千尋はそれは当然だな、と思った。

あの捕物劇のあった駐車場。

そして捕まった男が最初に居たビルの一室から半径にして、

約200メートル以内の位置に居なければ自分の『追跡』は及ばな  
いのだから、

『能力』の及ぶ範囲を考えると当然の事だと千尋は思った。

千尋裕也は右手をそつと自分の目の辺りに当てた。

彼には、ちよつと風変わりな”能力”があつた。

それは一般的には「透視能力」と呼ばれるものであつた。

通常の視覚では見る事の出来ない遮蔽された場所や、

遠くの場所での出来事を『視る』事が出来た。

つづく

## 第一章 【1 - 3】

二人きりになると志賀の表情は幾分くつろいだものになり、

「仕事が無事片付くとやっぱり、ホッとするなあ…。千尋さんもご苦労様です」と

ねぎらうように千尋に笑いかけた。

「僕もお手伝いとは言え、何事もなく終わって安心しました」

肩の荷が下りたのか、千尋も付き合いがそれなりに長くなっているこの知り合いに、安堵を含む表情を向けた。 志賀も頷いた。

「係長も多分言ったと思うけど、今回の作戦は迅速さが必要だったから…。

逃げるヒマや連絡させる余裕を与えずに一気呵成に畳み掛ける必要があった。

逃げられたら困るのはもちろんだけど、それとは別に、やはり

一般人に悟られない内に、すみやかに作戦を遂行したかったから。

ほら、俺たち『A・S』は一応、秘密組織と呼ばれる裏系だし。

だから今回、千尋さんが協力してくれて本当、とても助かったんだけど…も…」

志賀が上体を軽くかがめて、

千尋の顔をやや斜め下から覗きこむようにして、その表情から何かを読み取りたげにした。

千尋はそれから逃げるように、すいっと視線をそらせた。

志賀はその逃げる表情を追うようにして、また千尋を伺うが、

千尋はその”問いかけ”には答えずに、

すい〜と視線を、また迂回させて外すと、はぐらかすように、

「裏…ねえ…」と、どこか割り切れないような声で呟いた。

それを見ると志賀は苦笑し、気持ちをすっぱり切り替えた様子で体を起こし、「うん、そっかあ」と明るく破顔した。

その湿り気のない笑顔に千尋はバツの悪い気持ちになった。

「さて、『A・S』とは何ぞや…?」

志賀は社会科学の授業を行う教師のように、もったいをつけつつ、幾度目かの講釈を始めた。

「『A・S』とは。

その正式名称は『アブスワード・サービス』英語表記なら『Absurd・Services』。

略して『A・S』。直訳すれば『不条理な業務』という組織の名前なのです」

「それが組織名って何なんだろう…」

「…うちの組織は、表社会に名前を出ないし出さない。

ひっそりと社会の裏側をフィールドとし、活動する秘密の組織。

…人から見れば、怪しげな秘密組織…裏の秘密結社…の類に分類されるだろうね。

宗教的組織じゃないけど、基本、『調査』や『実行』を目的とし、時に『カウンターアタック』も行う組織だから」

「『調査』と『実行』…。それは以前にも聞いたけど…」

「うん。その仕事の範囲は多岐に渡る。

ごく身近な、町や都市の調査といった、役所がするような調査もあれば、

警察…いや、国の諜報組織が本来やるような諜報的『調査』と、

それを元にした”作戦”の立案と『実行』…。

そして時には、『A・S』を敵対視する相手の仕掛けてきた攻撃の迎撃。

平たく言えば敵を返り討ちにするための『カウンターアタック』も行う…と」

「その、”敵対相手”ってどんな相手でしたっけ…？」

「時々によって変わるね。一企業だったり、どこかの団体だったり、状況によっては非合法的な暴力的集金組織だったり、どこかの国の武装勢力だったり、とか…。うん、様々」

思い出しつつ頷いている志賀を見ながら、千尋は

「つまり、非合法の裏社会とか、とつてもヤバイ裏組織も相手にする商売、って事…」

と、声にぐったりと疲労感を漂わせた。

「状況によるけどそういう事もある。

基本、闇に潜んで行動する組織ではあるしね」と志賀は苦笑した。

「ああ、誤解がないように千尋さんにも改めて言うておくけど

うちの組織は、裏組織ではあるけど、犯罪を生業とする組織ではないからね。

うちのオーナーは薬物は無条件で嫌いらしくて、

そういう組織は金に糸目をつけずに潰していいってお達しも出ている。

つまりうちは、そのオーナーの理念に沿って、オーナーの目的を完遂するための、

その手足として動くためだけの、きわめて個人的と言える組織なんだ」

「…個人が、本来なら国が維持するような諜報組織を自前で用意して、動かしてるって事…？」

「規模はともかく、レベルはそれに近いね」

と志賀が顎を引きながら言うと、

個人で持つには大きすぎる組織の話に、

千尋は全体像が掴みきれずに形のいい眉をよせ、

「そんな事が出来るのはどんな人なんだろう…」と訝しげな声を出した。

「創始者でもあるオーナーは目も眩むようなお金持ち、と聞いてはいる。

日本人らしいとも聞くけど詳しくは分からない。

ま、俺たち下々の作業員にとっては雲の上の人だっというのは確かだな」志賀は言って笑った。

「…市民の感覚からは、かけ離れ過ぎていて、何度講釈されても、僕は『A・S』の事は未だに理解しきれないですよ…」

千尋はため息と共に、頭を左右にゆっくりと振った。

正直言えば、積極的に理解したいとも思わない。

関わりたい相手でもなかったが、知り合う因果があり、

そして現在は協力しなくてはならない理由もあった。

本来ならば『A・S』などという組織とは一生、関わる事が

なかったであろうはずの自分が今、こうして『A・S』に関わっている事に千尋は目眩すら感じていた。

続く

## 第一章【1・4】

「着きました」話している内に到着した駐車場で、志賀が目の前の車をつこりと指し示した。

「さ、乗って下さい」

言いながら志賀がキーでロックを解除した車は、ファミリー向けにCMもされている大きめのワンボックスカーだった。

三列シートの、奥行のある車体は人も荷物もたっぷり入りそうだった。

「…ちなみに、これのローンは何年でしたっけ？」

「モノを買うのにローンなんて組みません」

「……秘密の組織の人は、高給取りでもあるんですねえ……」

千尋はしみじみとそんな事を呟きながら助手席に座った。

「そりゃあね、高給でもくれなきゃ、こんな仕事やってられませんよ」

志賀は笑いながらエンジンのキーを回した。

シートベルトを巻きながら、千尋裕也は

「志賀さんの車がこのワンボックスカーというのはちょっと驚きです」

と素直な感想を述べた。

「どうして？」志賀がきよとんとする。

「志賀さんは独身だし、ファミリー向けよりは

2シータのスポーツタイプとか好きそうかなと思ってたんですけど」

「ああ、スポーツタイプも、もちろん好きだよ。でも、これに関しては実務も兼ねてるから」

「実務？」

「そう。大は小を兼ねる、だね。」

自分の車を『業務』に使う事もないわけじゃないから、

そういう時、2シーターじゃ使えないでしょ？ 機材も人も運べない」

「なるほど…」

志賀の手馴れたハンドル捌きで、車は静かに、そして軽快に走り出して駐車場を後にした。

その車の振動に身をまかせながら、

千尋はこんなとんでもない組織を創始したというオーナーの事に再び思いを至らせた。

「…目も眩むような金持ちが、

どうしてそんな組織なんて作らなきゃならなかったんだろう…？」

「金持ちだからじゃない？」

千尋の独り言に近い、眩きのような問い掛けに志賀はあっけらかんと答えを返した。

「え？」

「目も眩むようなお金持ち。時に世界も動かせるような金持ちだからこそ、逆に、

そういう組織を自前で持つ必要に迫られる事もあるんじゃないのかな…？」

下々の俺には分からない事だけど…」

「……！」  
そういう考えのなかった千尋は返答に詰まり、そしてハンドルを握る男の横顔を改めて見た。

この男、志賀諒介

年は自分より一つ二つ位、下だろうか？

知りあつて三年ほどになるだろうか。

手足も長く、バランスの取れた四肢の持ち主で、すっきりと整つた顔立ちは、精悍で見目も良い。

湿り気のない性格も、人なつこさを感じさせて悪い印象を人に与えない。

だが、それに騙されてはいけないのだろう、と千尋は思った。

彼は自分などが想像もつかないような様々な出来事を、ずっと沢山『経験値』として積んできているはずだ、と。

「志賀さんは『A・S』に入ってどの位でしたっけ？」訊ねていた。

「そうだね。高校在学中に入ったから、もう、7〜8年…経つかない？」

「そんな頃から…」千尋は驚く。

三年間前、志賀と知り合う機会があり、『A・S』の事も知っていたが

立ち入った事はあえて訊かなかったし、その必要もないと思つていた。避けてもいた。

1ヶ月前前から『A・S』に協力する、という形と立場で力を貸し始め、

組織の仕事を間近に、目にする事となった。

また、今までの”協力”では顔をあわせる事も無かった志賀の、仕事に関わる姿を、今晚は改めて間近に見た。

ターゲットを追う志賀の険しい顔つきや、

その機敏な動作をまじまじと目の当たりにすると、

自分が関わったこの組織も、この友人も、

やはりとんでもない相手だったのだなと、やっと知ったような気がした。

今まで、気さくな性格の志賀と普段に付き合う分には、

何も問題は感じなかったが、その日常の中での友人の姿とは全く違う、

見慣れない姿と表情に戸惑った。

そういった事は、今まではあえて考えなくても良いだろうと思っていたが、

やはり、そうもいかないらしい、と千尋は思い、自分の考えの足りなさを恥じた。

続く

## 第一章 【1・5】

千尋はうつむきがちに視線を落とした。薬指の指輪を触っていた。

三年前はもちろん『A・S』などという組織の事は、  
名も、その存在も、微塵も知らなかった。

『あの事』があるまでは…。

指輪を見詰める千尋の瞳が、まだ癒えぬ悲しみに曇った。

「そんな組織で志賀さんの仕事は…」

ぼつりともれた千尋の言葉に

志賀はちらりと視線を助手席に向けた。

しばらく考えて言葉を返した。

「俺の仕事は、今日あなたが”視た”ままです。

俺の仕事は『実行』する事。『実行部隊』ですからね。

良い事も悪いことも必要に応じてする部隊です。

最前線が担当です。ま、綺麗事は言いません」

さっぱりと、重さも暗さも感じさせない声でそんな事を言う。

感情をにじませないその声の向こう側で、

彼はどんな任務をこなし、どんな想いを積み重ねてきたのだろう…？

千尋はそんな事に想いを馳せた。

深夜の時間帯である事もあり、車を走らせていても、周りの気配はしんと沈んで、どこか遠かった。

夜の底を走る車の中で、世界から見放され、道行きを共にする、たった二人きりになったようなもの寂しさに千尋は身を浸していた。

海の底から、夜の水面を見上げる魚のような気持ちで、静かな、だけど何かが立ち揺れる夜の底の沈黙に自身を沈めながら千尋は車の振動に身を任せていた。

#### 千尋裕也に関するレポート

千尋裕也の有する能力は一般に透視能力と呼称されるものである。

それはクレヤボヤンス (Clairvoyance)、もしくはリモートビューイング (Remote Viewing) とも呼ばれるもので、

通常、視覚では視認出来ないような遮蔽された場所や遠くの場所で起きる出来事を離れた場所から視覚的に座視する能力である。

その種類は、近距離の、視野の範囲内を見通す『通常透視』と、視野に入らない遠くを見る『遠隔透視』とある。

彼の場合はごく近距離から、最大で約200メートル程度までの遠距離『透視』を得意とし、80パーセント以上の正解率を誇る。

今回の協力においてもその能力は的確かつ、正確に発揮されて被疑者を捉え、その位置を我々に伝達し、作戦の遂行に大きく貢献した。

しかし彼の能力については、まだ未知数の部分もあり、それを見極めるのは、今後の観察の重要なテーマになるであろうと思われる。

レポート報告：志賀諒介

タン…。

パソコンのエンターキーを叩いて、志賀諒介は書き上げたレポートをメール送信した。

千尋裕也を自宅に送り届け、志賀自身も自宅に戻ると、リビングのテーブルでパソコンを開いて先程の、合成麻薬組織襲撃の報告書を書き上げ、更にしばらく前から用意していた

千尋自身に関するレポートも共にして送信を済ませた。

書き上げてはたと気がつけば、

深夜というよりは、既にほとんど朝に近い時間帯になっていた。

ほっと息を吐き出すと、パソコンの横に置いているマグカップをとり、冷めてぬるくなったコーヒーを喉に流し込みながら、カーテンの隙間から伺えるまだ暗い外の闇に視線を向けた。

そして、座椅子の背面に体重を預け、千尋の面差しを思い出しながら考えこむようにして洗面を作った。

続く

## 第一章 【1・6】

ピピピピ...

こちらの都合など八ナから無視して無慈悲に鳴り続ける  
目覚まし時計に、千尋裕也はウダウダと手を伸ばしてそれを黙らせ、  
ついでに今の時間を確認した。

時計の針は、いつもの朝の起床時間を指していた。

「しまった...今日は休みなのに...。目覚ましを解除するのを忘れて  
いた...」

千尋裕也はベッドの中で脱力の息をこぼした。

目覚まし時計のベルの音というものに  
何時まで経っても慣れる事が出来なかった。

夕べ、と言うよりは既に今朝であるが、『A・S』の仕事に協力し、  
志賀に送ってもらって自宅に帰ってきたのは、夜中の二時半を回っ  
た時間だった。

今日は仕事も休みだし、

何より”力”を使った事による疲労が体にまだ残っていたので、

千尋は二度寝を自分に許し、

再度目を覚ました時、時刻は午前11時近くになっていた。

コーヒーとトースト、サラダとヨーグルトを用意しつつ、

洗顔等をすませて、パジャマのまま一人、ダイニングテーブルにつ  
いた。

20代後半ではあったが、学生と言っても通用しそうな涼やかな雰囲気を感じさせる顔立ちだった。

柔らかな表情でコーヒーマグを口元に運びながら、新聞に目を通し、次いで仕事の書類に目を通す。

その左手の薬指には銀色のシンプルなデザイン指輪があった。

時折、彼はそれを指でさわっていたが、ふとその視線をリビングボードへと向けた。

そこにシンプルで小さな写真立てが一つ置いてある。

写真立ての中で、20代前半の若い女性が可愛らしく微笑んでおり、千尋はその写真に穏やかに微笑んだ。

「…おはよう」

電話が鳴った。出ると海外にいる知人からだった。無事こちらに着き、病院にも落ち着いたという連絡だった。

千尋はホッと表情を緩めた。まだこれからはあったが、とりあえずは一安心という感情を、声と顔に浮かべ、しばらく会話をして電話を切った。

そして、リビングボードの写真を再び振り返る。

「…安心して。無事に着いたそうだよ。上手くいくよう君も見守っていて…」

そう呟くと千尋は、一人きりの部屋で寂しそうに微笑んだ。

千尋の仕事は児童向けの書籍をメインに扱う出版社の営業だった。その日、担当している書店を幾つか回り終え、街中を徒歩で移動していて千尋はその気配に気がついた。

自分を伺う、見張るような気配。  
足を止め、後ろを振り向く。「……」

だが、そうやって目視する限りでは怪しい人物は目には入らない。再び歩き出し、千尋は眉をしかめた。

断定は出来ないが、好意的とは感じ取れない気配がやはり再び自分を追い始めたのが分かったからだ。

こんな気配を感じるのとはこれが初めてではなかった。

ここ数日、千尋は誰かが自分を追跡してくる気配を感じ取っていた。

最初は気のせいかとも思ったが、いつまでたってもその気配は自分にまとわりついてくる気がした。

友好的、とはイメージ出来ないその気配に、

千尋は内心でため息をこぼし、歩みを止めはせずに”力”を周りにゆっくりと広げていった。

先端に「目」をつけた見えない長い触手、もしくは医療の場で使われる、胃カメラ等に使われる

内視鏡、ファイバースコープ等の格段に長い形のをイメージした。

そしてそれを、自分の周りに幾つも配置し、  
彼の上下左右や前後にゆっくりと伸長させていき、辺りを探る…。

そんなイメージと共に彼は「力」を、「能力」の行使を開始した。

彼の所有する特殊能力は”透視能力”と呼ばれるものだ。

それは普通の人には見えない場所や出来事まで見通す能力だった。

”使い方”によっては便利この上ない能力だったが、  
必要がない時はこれを極力使わないよう心がけた。

彼の感覚では、コレを使うのは、ズルだろう、  
というやましさも、やはりあった。

他の人には使えない能力。

そして、自分がコレを使える事自体を、他者に明かしてはいないの  
だから、

これを普段の生活で使うのは後出しジャンケンであり、  
インチキに近いズルだという認識にどうしても至ってしまうのだっ  
た。

だから、「コレ」を使うのは、千尋の「能力」を知っている人間に  
請われた時か、これを使わないと、

状況を打開できないと感じた時だけだった。

続く

## 第一章 【1・7】

そろそろ街が夕闇に包まれる頃だった。

時刻は六時50分を指そうとしている。待ち合わせは7時にしていた。

彼が今、居るのは待ち合わせにも良く使われるデパートの入り口付近だった。

その入り口の辺りは、イベントにも使われる小さな広場となっており、広場は行き交う人々や、待ち合わせにやってきた人たちのざわめきで賑やかしかった。

志賀はその広場の、端の目立たない位置を取っていたが、視線をチラリと腕時計に落とし、広場と歩道の境目付近まで移動すると、左右の歩道に視線を巡らせた。

と、左の道を千尋がこちらに歩いてくるのを見つけて表情を緩ませた。約二週間ぶりの再会だった。

前回『A・S』の仕事を手伝ってもらった際に、今日の約束を取り付けておいたのだ。

表向きは手伝ってもらった礼をしたいのと、美味しい創作和食の店を見つけたのでどうかと言って誘ったが、千尋に尋ねたい事もあったの事だった。

千尋の方も、それを感じ取ったらしく、  
やや気まずげにしつつも、会食を承諾した。

何を訊ねられるか薄々察し、  
バツの悪そうだった顔を思い出して、志賀はクスリと笑った。

自分より幾らか年上ではあったが、  
隠し事は自分より下手そうだなと思い出していた。

こちらに歩いてくる千尋を見ながら、志賀はおや？と思った。

千尋がこちらに気がついている様子はまだない。  
だが、その顔に薄く疲労の色が浮かんでいるのがうかがえた。

仕事関係の疲れだろうかと思いつつ、  
志賀は合流するために千尋に近づいていった。

夕刻の、人の移動の多い時間帯だった。

すれ違いざまに母子連れの子供と、千尋が軽くぶつかり、  
六歳位の男の子が石畳の歩道にすてんと転んだ。

「あらっ、ナオくん」母親があわててしゃがんで  
子供を抱き起こそうとする。

「あ、ごめんね、大丈夫？」  
千尋も慌てて、腰を低くして男の子の顔を覗き込み  
擦り傷もなさそうなのにホッとして  
「ちよっと考え事してて…ごめんね」と笑いかけた。

子供を抱き起こそうとしていた若い母親は  
あ…、と小さく目を見張った。

千尋が笑うとその場の空気がふわりと柔らかく緩んだ。

湖面に落とされたかけらの作る小さな水紋が、  
大きな輪の連鎖へとゆっくり広がっていくように。

または、なだめ、暖められて部屋をゆったりと循環し、  
辺りに柔らかく広がっていった空気が、  
気持ちをじんわりと平らかにしていくように。

そんな雰囲気が彼を中心に、  
のどかに広がっていくのがわかる…。

「あ…いえ、こちらこそ…」母親は恐縮しつつも、  
とっさに相手をリサーチしていた。

見てまず、最近お気に入りの若い俳優を思い出していた。

子供と一緒に見ている特撮ヒーロー番組に出ている主役の俳優。  
その番組は子供たちだけでなく、  
イケてる顔立ちの俳優の起用で、母親たちにも人気がある。

…その俳優がそっと笑った時の表情とかが特に似てるわね、  
と思いつつ、明日、友達に会う時に、  
あの俳優に似た人に会ったのよと、話してみようと思った。

話が盛り上がりそうだと考えると楽しくなった。

千尋と挨拶を交わして去っていく母親が  
どこか楽しそうな様子なのに志賀は  
目ざとく気がついて、小さく笑った。

その姿を目で見送っていると「志賀さん？」と声をかけられた。  
視線を返すと、千尋が既に立ち上がってこちらを見ている。

「もう来てたんですか？相変わらず、時間厳守ですね」

「ええ、仕事柄、時間にはうるさくて」

志賀はしたり顔でうなずいた。

千尋は馴染みの顔を見つけて歩み寄って来ながら、  
口元をホツとしたように緩めた。

志賀は彼のそんな表情は嫌いではないと思った。

自分が彼にとつての、日常の一部であり、

その生活の範疇に属する、含まれている相手だと解釈されているよ  
うで、

悪くないな、と思いつつながら笑みを返していた。

づけ鮪と本しめじの白和えをつつきながら、志賀がのたまう。

「うちはね、怪しげな組織だけど、別に非情な組織ってわけじゃないからね」

「ふうん、そうなんだ？」

千尋はタコとセロリの冷菜を口にしながら相槌を打った。

「そうだよ。普通の会社と同じように有給だってちゃんとあるし希望や事情を鑑みた配置転換だってあるし、福利厚生だって保養施設とか、ちゃ〜んとあるんだからっ」

「へえ〜…」

「うちの組織は、名前に『不条理』と、つく位だから、どこかへそ曲がりで、風変わりな組織なのっ！  
そんじよそこらの犯罪組織なんかとは  
一線を画するんだと、俺は声を大にして言いたいっ！！」

「ははは…」

志賀の胸を張っての妙な自慢に千尋は苦笑する。

今、二人が居るのは志賀が誘った和食の店で、そこは、隠れ家的雰囲気がありつつも、静かすぎる、と言うこともなく、程よく落ち着ける店だった。

そのテーブル席で、二人は向い合って座り、注文した食事に日本酒も添えていただいていた。

不快を感じない程度のざわめきがたゆたう店内で、お猪口でいただく日本酒が程よく体を巡ると気持ちもほぐれて、話も食事も自然と軽やかに進む。

「でもまあ」と志賀は声を明るくした。

「うちの組織は仕事が多岐に渡ってるから、物騒な仕事ばかりじゃなく、のんびりとした仕事も多いからね。

実際、千尋さんが手伝ったと言う『A・S』の他の仕事もそんな無茶なものじゃなかったと思うけど…どんなでした？」

志賀が興味ありげに千尋に水を向けると、千尋は来たな、という表情を浮かべて少し、身構えた。

「ええ、そうですね。すぐに”仕事”に取り掛かるのかと思ったら、そうでもなくて。まずあったのは、僕の透視能力のテストというか、チェックだったし…」

「なるほど。それは大事だね。

あなたの”視る”能力がどの程度のものなのか、それを出来るだけハッキリさせておくのは必要だから…」。

その結果によって振り当てる仕事の内容も違ってくる。…で、どんな仕事が回って来たんですか？」

滋賀はお猪口を口元に運びながら、軽く身を前に乗り出すようにした。

「…失せ物の追跡透視の調査とかありましたね」

「失せ物…。何ですか？」「盗まれた絵画の追跡…」

「ああ…。高価な絵は、売買の上がりもいいし、人間を誘拐するより世話も面倒も少ないから管理も楽だしで、人よりそういうのを狙う輩もいますね」

「ええ。その絵を窃盗グループから奪取するのに、目星をつけた家屋内の、どこに絵が置いてあるかのチェックとか間取りの確認とか…」「千尋さん向きの仕事だね」

「他には、訳ありげな家出人の搜索とか…」

「なるほど…。それを見えない”触手”で探るわけね？  
…あらあ、まあっやだっ、触手ですって…。キャッ、やらしっ！  
千尋さんたら、ムツツリさんっ！」

からかい半分で、志賀がオネエ系のように頬に両掌を当てながら体を左右にイヤイヤと振ると、千尋がムキになって言い返してきた。

「やらしくなんてありませんっ！」

「やらしいと感じる志賀さんがやらしいんですっ！」

小学生みたいな千尋の反論に、志賀は楽しそうにぷつと吹いた。

千尋はもごもご言いながら銀ダラの西京焼を箸でほぐす。

「し…仕方ないじゃないですか。」

一番、体に負担の掛からない方法を模索してたら、そこに落ち着いてしまったんです…」

言いながらほのかに目を伏せた千尋の、程よく酒が回って、

淡く朱に染まっている目元を志賀はじつと見た。

「ハッキリしたイメージを作った方が、”力”が使い易いし、かかる負担も少ないし…。それに『視る』というところやはり『目』をイメージするから…、

『目』にリードのようなものを付けて動かすイメージが僕的には使い易くて…。」

「そしたら、触手かあ…」志賀が楽しそうに笑う。

「そう、負担を減らすための手法の一種だから、僕はこれでいいんです。それに、状況によって使うイメージは色々変えてるんです、これでもっ」

「はい、つまらない事いいました。すみませんでしたあ…」

千尋が力説するのに志賀は苦笑し素直に詫びた。

詫びつつも、負担軽減は確かに大事だなと考えた。

千尋の能力は『A・S』にとって確かに有益で是非とも手に入れたいものではあったが、

しかし、能力を使うことによる、その引き換えに千尋の体にかかる負担を考えれば

野放図に使うわけにもいかないだろう、とも思う。

”触手”等のイメージは、

千尋が力を使う際の一番、初歩の方法だった。

多少、時間はかかるし、視れる範囲もさほど広くないが、本人にとっての一番楽な方法だ。

だが、それでは追いつかない、となった際には、第二の方法を使う。

標的とする人物、もしくは対象物をまず、  
第一の方法で透視して”捕獲”する。

その人物を起点として、  
光の輪をゆつくりと周囲に広げていくようにイメージしながら  
その周辺を必要範囲に応じてスキャンしていく。

更にその人物に、『目』をぴったりと密着させる。

その人物が移動する際、千尋の『目』も離さずに付けたまま  
共に移動させて、その行動をずっと追う。

密着して追える範囲は、最大限で約200メートル位まで。

先日、千尋が『A・S』に協力した時に用いたのが  
この方法だった。

そして第三の方法は、千尋自身を力の中心点、起点として、  
彼の能力で”視れる”最大範囲を一気に、  
ごく短い時間でスキャンする。

膨大な情報を一瞬で、ごっそりと取る…。

しかし、これは心身にかかる負担が大きいので、  
千尋自身もめったには使わない。

と、考えて、志賀は、ああ…と思った。

ああ、一度だけ、目の当たりに見たな…。と、思い出した。

三年前だ。三年前に一度だけ。

そしてそれが千尋との出会いでもあったな…と。

つづく

A・S 不条理な感情 第一章 【1・9】

今まで『A・S』に関して千尋と何回か話を交わした事はある。自分がそれに所属している事を隠す必要はなかった。

最初の出会いの時にそれはもう、わかっていた事なのだから。

しかし、積極的に千尋を『A・S』に係らせようとは思ってはいなかった。

少なくとも志賀自身はそう考えていた。

『A・S』に対しては千尋を今以上に近づかせる事はせず適度に距離をとらせ、時間の経過と共にその距離を次第に大きくさせていって、

いつかただの過去へと、忘却へと押し流してしまえばいいと思っていた。

それなのに…と、思いながら志賀は千尋の手の指輪をちらりと見た。

前回の”仕事”に自分たち以外に、サポートとして”協力者”が加わる事は知ってはいた。

知ってはいたが、それが誰なのかは直前に近い時まで知らなかった。最終のブリーフィングでそれが千尋と知った時は驚いた。

千尋との”接触”は自分に任されていたはずだったが、してみると自分以外にも千尋と接触していた者がいた事になる。

自分の報告が生ぬるくて埒が明かないから、

誰かが自分を飛ばして千尋に接触したのだろうか…？

そう思つて、それは誰だろう？と志賀は考えた。  
うつすらとその人物の予想がつく気がした。

自分の”仕事場”と、千尋、という組み合わせは  
志賀にとつて一番見たくない構図の一つだった。  
現場で千尋を目にした時は苦いものがこみ上げてくる気がした。

が、実際に仕事となればそうも言つてはいられない。

志賀はそんな感情は面には出さずに淡々と仕事をこなしていきなが  
ら、

同時に、なるほど、とも思つた。

なるほど、こんな力をサポートとしてもつと使えるようになれば  
自分たちの仕事はずいぶんはかどるし、効率も上がる。

と、同時に今後、千尋を『A・S』に係わらせないようにする事が  
ますます難しくなっていくだろう、とも思つた。

「……………」

ふと、箸を動かす手を止めて、志賀は顔を上げた。  
前には千尋のほろよいかげんに綻んだ顔がある。

その顔を曇らせる事を覚悟しながら志賀は口を開いた。

「…千尋さん」「はい？」

「訊ねたい事があります」

「…何でしょう…？」

志賀が箸を置き、両の手のひらをテーブルの上であわせて、  
正面から向き合うようにした。

千尋もつられるように佇まいを正しながら

その顔にチラリと気まずそうな表情を浮かべた。

「…今回、『A・S』に協力した理由は何ですか？」  
志賀は正面から千尋の目を捕らえて訊ねた。

「まわりくどい言い方は結局しないで、”正面突破”で訊ねてくるそのやり方に、志賀らしい、と千尋は苦笑した。そうやって正面から訊ねられれば、千尋も、もう小ざかしく誤魔化す事は出来ないな、と思った。

千尋は背筋をまっすぐ伸ばすと  
ゆっくりと、言葉を探すようにして話し始めた。

「…しばらく前からとても困っていた事があって…。それで今、僕にどうしても必要なモノを援助してもいい…という申し出があったんです」

「援助…？ …『A・S』が…？」 「ええ…」 千尋はゆっくりと頷いた。

何だろう、といぶかしげに志賀の眉が寄せられた。

千尋はA・Sに貸し借りも、そもそも関係も作りたくないはずだった。

そんな志賀の表情を読んだのか、千尋は

「金です」と、

表情を自嘲気味にやや歪めた。

「……」 志賀が軽く目を瞠っていると、  
千尋はちらりと自分の手の指輪を見て、小さく息をこぼした。

「…妻の…」 そう言って逡巡を見せて、千尋は次の言葉を押し出した。

「妻の母が…。僕にとっては義理の母にあたる人ですが…。大きな病を…。心臓の病気を今、わずらっていて…」

「……」

「その治療には移植手術が必要なんです。でも悠長にドナーが現れるのを待っている余裕もない状況で…。それでもアメリカの病院で手術が出来る事にはなったのですが…。その費用として億前後の金が必要となつて…。どうしたものかと途方にくれていたんです」

千尋はやや俯きながら苦しげに言葉を続けた。

「…妻は一人娘でしたし、妻の父も既に他界されていたから、僕も何とか力になりたかったのですがさすがに金額が大きすぎてどうにもならなくて手詰まりだった時に…声をかけられたんです。

資金も渡米のための準備も、『A・S』が全面的に協力しても良い、手厚い手配をしよう…と。

そのかわりに、僕の”力”を『A・S』に貸して欲しい、

『A・S』の協力者になつて欲しい…と。そういう申し出があつたんです」

「…そんな事が…」志賀は驚き、小さくうめいた。

彼の義理の母が病にある事は知ってはいた。

しかし、そこまでの状況だとは掴んでいなかった…。

その自分のうかつさに齒ぎしりしたくなる。

「正直、かなり悩みました。

けど、もう悩んでる時間さえ惜しくて…」

千尋は顔に苦悩を浮かべながら言葉を続けた。

「だからこの、『A・S』からの申し出を受ける事にしたんです。志賀さんに、何も話さなかった事については、申し訳なくて…心苦しく思っています。」  
そう言つて千尋は志賀にすまなそうに頭を下げた。

『A・S』関係者でもあり、友人でもある志賀に『A・S』絡みの話を

何もしていなかった事をすまなく思っている事は、その顔に浮かぶ表情が物語っていて、志賀としてもそれ以上、問いただす気持ちにはなれなかった。

「あ、いや…」

志賀はうるたえ、苦さを噛み締めながら問うた。

「その協力…つていうのは、どのくらいの期間…？まさか、無期限…」

「いえ、朝倉さんは、とりあえず一年…。  
出来れば2、3年をと…」

「…朝倉さん？…総務の朝倉さんっ…！？  
話をもつてきたのは、朝倉さんだったの？…やっぱり！？」  
出てきた名前に、予想してはいたが、志賀は驚きと共に、やはりという思いを感じながら身を前に乗り出していた。

千尋は志賀のそんな内心に気がつく風もなく、淡々とうなずき、  
「ええ。今は総務なんですか？」

初めて会った時は、もっと違う部署でしたよね…。  
今、おいくつでしたっけ。何だかあまり歳を取らない印象の人ですよね。

朝倉さんって…」と、苦笑した。

自身も笑うと学生のように見える千尋の顔を見ながら、志賀もああ、そうだなあ、と内心で肯定した。

志賀より六歳以上は年上であるはずの朝倉は30代ではあったはずだが、

パツと見、20代にしか見えないし、何年たってもその印象は変わらなかった。

「朝倉さん、一年前に総務に移動になったから…。

そっかあ、やっぱり朝倉さんかあ…」

ふー…と小さなため息と共に志賀は内心でしおたれた。

自分以外に千尋に接触してくる者がいるとしたら、

朝倉ではないかと思っではいた。その予想は当たった。

朝倉は移動前までは志賀と同じ部署に所属していた。

志賀と同じく、作戦の実行と遂行を目的とする部署である『情報作戦部、機動課』に属していた。

そして、当時志賀の属するチームの、彼は班長だった。

しかし一年前に朝倉は最前線を去り、総務へ移動となったのだ。

そういえば、と、志賀は思い返した。

三年前のあの事件、あの時に…。

朝倉も共にいた。

そう、自分と共に、彼もすべてを見ていたのだった…と。

続く

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2935u/>

---

A・S 不条理な感情

2011年10月12日09時51分発行